



Osaka Gakuin University Repository

Title	watershed について <i>On Watershed</i>
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiro Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 85 号 : 1-20
Issue Date	2023.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

watershed について

黒 宮 公 彦

1

『ウィズダム英和辞典』（第4版、三省堂、2021年）の“watershed”の項には次のように書かれている。

(1)

- 1 [[通例単数形で]] « 歴史・人生などの » 転機, 変革期, 分岐点 (turning point).
- 2 《(英) [[通例 the (9 o'clock) ~]] (午後9時の) テレビ放送転換点 《この時間以前は性や暴力などの映像を控える》。
- 3 《(地) 分水界 [嶺] 《(川の流れを分ける高い土地)》。

『ジーニアス英和辞典』（第5版、大修館書店、2014年）の同じく“watershed”の項には次のように書かれている。

(2)

- 1 [通例単数形で] [歴史・人生の] 分岐点, 転機 (turning point).
- 2 分水嶺 [界] ((米) divide).
- 3 《(英) [the ~] (子供の) 寝る時間 《通例夜9時; これ以降はテレビで子供にふさわしくない番組が放映されることがある》。

見てのとおり (1) と (2) では、第2項と第3項の内容が入れ替わっているものの、書かれていることはほぼ同じである。ここで、(2) と同じく大修館書店から出版されている『ジーニアス英和大辞典』（初版、2001年）の“watershed”の項を確認するとあることに気づく。

(3)

1 分水嶺 [界] ((米) divide).

2 ((米)) (河川の) 流域.

3 ((正式)) 一大転機, 重大な分岐点.

4 ((英)) (子供の) お休み時間《通例夜9時; これ以降はテレビで子供にはふさわしくない番組が放映されることがある》.

(3) には (1) や (2) に記載のない「(河川の) 流域」という語義が加えられていることが一目瞭然である。『ジーニアス英和大辞典』にこの語義が記載されており『ウィズダム英和辞典』『ジーニアス英和辞典』には見られないということは、この語義は大辞典クラスの辞書には記載されるべきだが中辞典クラスの辞書に記載するほどのものではない、換言するとそれほど使用頻度は高くないということを意味する。しかしそれは本当なのだろうか。(3) ではこの語義が第2項に挙げられていることを考慮すると頻度は決して低くないのではあるまいか。この点を明らかにするのが本稿の目的である。

2

2.1 OED の記述

まずは『オックスフォード英語辞典 (The Oxford English Dictionary)』（以下 OED と略記する）の“watershed”の項を確認しておこう。

(4)

1. The line separating the waters flowing into different rivers or river basins; a narrow elevated tract of ground between two drainage areas: = WATER-PARTING.
2. *loosely*.
 - a. The slope down which the water flows from a water-parting.
 - b. The whole gathering ground of a river system.
3. [? Associated with SHED v.¹ 4 d.] A structure for throwing off water.

*OED*に「成人向け番組を放映してよい境界の時刻」はおろか「分岐点」の語義すら掲載されていないのは驚くほかないが、いずれにせよ watershed の本来の意味は「分水嶺」であることが分かる。加えて2.b.にある“The whole gathering ground of a river system.”とはまさに流域のことであり、*OED*がこの語義の19世紀の用例を示している¹ことから、古くからある語義であることが確認される。

2.2 「分水嶺」とは

次に、そもそも「分水嶺」とは何かについて確認しておこう。

ある山に北斜面と南斜面とがあるとす。そこに雨が降ると、北斜面に降った雨水は北斜面を流れ落ち、いずれ川に流れ込む。南斜面に降った雨水も南斜面を流れて、そちら側の川に合流する。すると、山の頂上付近に、雨水が北斜面と南斜面のいずれを流れることになるかの分かれ目となる境界線が必ず存在することとなる。これが分水嶺だ。分水嶺付近に降る雨は、落ちた場所が1メートルしか離れていないのに、最終的に一方は日本海に、一方は太平洋に流れ着くということもあり得る。

以上から分水嶺とは高山の頂上付近にあるものと思いがちだが一分水「嶺」という訳語がこの誤解に拍車を掛ける一大した高地でなくとも、周囲よりも少し高くなっているところであれば雨水の流れの境界となることはあり得る。つ

まり必ずしも分水「嶺」ではないため、分水「界」という用語が用いられることも多いようだ。(1)では「分水界 [嶺]」、(2)と(3)では「分水嶺 [界]」という訳語が与えられているのもこのような事情によるものと思われる。

ところで、山に降った雨が集まって小さな流れとなり、それらが集まって小川となり、下流へと流れていくに従って合流し次第に大きくなり、最終的には大河となって海や湖に注ぎ込む。この総体を「水系」という。水系とはその名のとおり水のみに着目した用語だが、川が流れる周囲の土地も含めた領域のことを「流域」という。そして水系の始まりは山に降る雨なのだから、分水嶺(分水界)は「水系と水系の境界」なのである。このように分水嶺、水系、流域は密接に関係し合っている。

(4)に見るように *OED* の2. は本来の語義 (= (4) の1.) の緩用だ (loosely) と断った上で、a. 分水嶺から水が流れ落ちる傾斜(坂)のことで、b. 水系の流域全体のこと、と述べている。しかし実際の用例を観察すると流域の全体ではなく一部地域に対して *watershed* が用いられることが非常に多い。そして「分水嶺から水が流れ落ちる傾斜」も流域の一部であることを考えると、*OED* の2.a. と2.b. の語義の区別は必ずしも明確ではない。もう少し正確に言うと、*watershed* の語義を「流域の全体または一部」と捉えたら2.a. も2.b. も、さらに「流域の(必ずしも分水嶺付近とは限らない)一部」という意味もすべて含まれることになるということである。

3

では *watershed* は実際にはどのような意味で用いられる語なのだろうか。本節ではコーパスを利用した観察を通してこの点を明らかにしていきたい。

(4)に見るように *OED* は2.b.、すなわち「流域」の語義についてアメリカでの用法だといったことは特に述べておらず、イギリスでも使用される可能性はある。²しかし『ジーニアス英和大辞典』は(3)に見るようにこの語義に対して(米)のラベルを表示している。ここではひとまず『ジーニアス英和大辞典』

の記述を受け入れることにしよう。

そうなる調査にはアメリカ英語のコーパスを利用する必要がある。本稿では *Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA と略記する) を使用することとする。以下に示す例文で特に断りがなければ COCA から採ったものとお考えいただきたい。なお COCA は用例を検索語を含む文単位で示すのではなく、検索語の前後のそれぞれについて13語程度(ピリオドを越えることもある)を示す形式のものである。場合によっては watershed の意味が分かりづらいこともあるため、以下必要に応じて先行文脈を補うこともある。また逆に検索語を含む文の文頭よりも前、あるいは文末よりも後の語(つまりピリオドを越えたところにある、直前直後の文に含まれている語)を省略することもあることをあらかじめお断りしておく。

3.1 調査方法

本研究では COCA を用いて watershed を含む用例をランダムに200例抽出した。その上でそれらを観察することにより実際に使用される watershed の語義を確認し、それぞれの語義が使用される割合を調査した。

なおここまでで述べてきたことから考えて、コーパスに現れると予想される語義は大きく分けて「分水嶺」「分岐点」「流域」の3つであることに注意してほしい。「成人向け番組を放映してよい境界の時刻」という語義はイギリス英語であり、COCA はアメリカ英語のコーパスなのだからこの語義の用例は COCA には現れないだろうと予想される。そして実際にもこの語義の用例は見られなかった。

また、実際に調査すると1つの用例に watershed が複数回現れるものも見られた。具体的には2回現れているのが12例、3回現れているのが3例あった。したがってランダムに抽出した200例の中に watershed は218回見つかったことになる。しかし同一の用例の中に「分水嶺」の watershed と「分岐点」のそれとが共起することは考えにくい。そして実際の観察でも1つの用例に含

まれる複数の watershed はすべて同じ語義を表していた。このため1つの例に複数の watershed が含まれていたとしても watershed の語義について考える場合には1つと勘定することにする。他方次の3.2.1節に見るように watershed の語形について考える場合には218例のすべてを対象とする。

3.2 調査結果

3.2.1 watershed の語形

watershed の218例のうち複数形の“watersheds”は2例見られただけで、残りの216例はすべて単数形だった。そのうち所有格の“watershed’s”が1例見られたが、それ以外は“watershed”の形で使われていた。

ここから watershed は単数形で用いられることが圧倒的に多いと考えられる。

3.2.2 watershed の語義

最も多く認められた語義は「流域」であり、200例中136例(68.0%)を占めた。それに次ぐのが「分岐点」の58例(29.0%)で、これら2つで194例(97.0%)を占めた。逆に明らかに「分水嶺」の例だと判断されたのは3例しかなかった。加えて「流域」か「分水嶺」か判断しかねたものが1例認められた。「分水嶺」の3例を以下に示す。

(5) a. It stood alone, its roof spread out against the sky, on the watershed, the high spine between two opposed territories.

b. [...] the GR 10 from the Mediterranean to the Atlantic, a trail that follows the watershed spine of the mountains so closely that one often has one foot in France[.]

c. [...] an illegal track farther upriver to drag mahogany logs over the divide to an adjacent watershed.

もつとも (5c) の例で分水嶺を表しているのは厳密に言うとは *divide* で、*watershed* は (4) で見た「分水嶺から水が流れ落ちる傾斜」を意味していると考えべきだろう。あるいは「水系全体」を意味している可能性もある（もつともこの場合でも山頂付近の流れを念頭に置いているだろうが）。このように厳格な意味で分水嶺を捉えると該当する用例はいよいよ少なくなる。逆に分水嶺を緩く捉え、山の比較的頂上付近の川の流れやその周囲の土地を指す *watershed* を「分水嶺を表している」と見なすならば分水嶺の用例はある程度は増える。とりわけ次の (6a) は先述した「流域」か「分水嶺」か判断に迷った例である。

(6) a. [...] I was climbing at 18,000 feet in the upper reaches of the Imja River watershed, near where Erwin Schneider had taken one of his photographs.

b. In freshwater ecosystems, sediment biota are routinely affected by nutrients and particles from organisms in distant parts of the watershed or upstream[.]

しかしながらこうした山頂付近の川の流れを指す *watershed* は、(6a) の例も含め、私の考えでは流域であって分水嶺ではないと思う。こうした *watershed* の例のほとんどでは分水嶺も含まれているように思われることは確かだが、それでも「雨水がどちらに流れていくかを分ける場所」を問題にしているのではなく、単に「川の最も上流の部分」もしくは「川に注ぐよりも前の水の流れ」のことを指しているに過ぎない。仮に *watershed* という語を知らない英語学習者がこうした用法の *watershed* を含む例文を目にしたとしよう。この学習者が辞書を調べて「分水嶺」という語義を知ったとして、それが山頂付近の流れやその近辺のことも意味すると推測できるとは思えない。ここから少なくとも (6b) は次節に見る「流域」の例と見なしてよいと私は考え

る。あるいは(6a)でさえも「流域」の例と見なすべきなのかもしれない。

ちなみに上で私は「流域」の用例は136例見られたと述べたが、この中に(6b)は含めたが(6a)は含めずに判断保留とした。この1例も「流域」に含めるなら137例が見られたこととなる。

3.2.2.1 「流域」について

次に「流域」の意味で用いられている例を見てみよう。

(7) [...] farmers didn't have to accidentally dump millions of gallons of pig sewage into the watershed every time their waste lagoons got full.

この文は豚の飼育が行われている地域での状況を描写しているのだから、この watershed は山頂付近の分水嶺を意味するのではなく、それどころかそれほど高地でない分水界を指すのですらなく、水系や流域を表していることは明らかであろう。しかも分水嶺から始まって海や湖に注ぐまでの水系や流域の全体を指しているのではなく、養豚が行われている場所の周辺のみが考慮の対象となっていることもまた明らかである。

すでに述べたとおりコーパスからランダムに抽出した200例のうち136例が流域という語義で用いられていたわけだが、この(7)のようなものが最も典型的な例と言える。以下さらにいくつか用例を挙げる。

(8) a. The loss of lakes in watershed development also weakens the linkage between streams and the ocean.

b. The 64,000-square-mile Chesapeake Bay watershed, originally home to Native Americans and later to the few English settlers [...]

c. The incentive to radically transform the lower Snake River watershed from a small-scale agrarian society to large-scale agribusiness

was an issue of economic growth[.]

(8a) では湖や海洋が現れるのだからこの watershed は明らかに分水嶺ではなく水系や流域を意味している。さらに (8b) では watershed が「チェサピーク湾に注ぐ水」という観点から捉えられている。既述のとおり水系とは最終的に一つの川となって海や湖に注ぐ水の流れの総体のことだと私は理解しているのだが、チェサピーク湾に注ぐ川は数多く存在しているのであり、したがって (8b) の watershed はそうしたチェサピーク湾に注ぐ複数の川のそれぞれの流域をすべて合わせたもの (64,000平方マイルにおよぶという) を指しているのだと考えられる。異なった複数の川はそれぞれ異なった分水嶺に端を発しているだろうから、この watershed が分水嶺を表すことはあり得ない。むしろ逆に (実際にはあり得ないが) チェサピーク湾に端を発し、上流へと遡っていく数々の川の流域の総体が watershed と表現されているのだと捉えた方がこの watershed は理解しやすいように感じられる。またそう考えなければ “the Chesapeake Bay watershed” という句は解釈できないのではないか。以上から bay、gulf、ocean、river といった語と共に起する watershed は「流域」の意味で用いられていることが多いと推測される。

流域と人間の営みの関係を考えさせられる用例も多く見られた。(8c) はその一例だと言える。川は人に飲料水や農業用水をもたらす。また人だけでなく家畜も水を飲む。要するに川の流域とは農業や畜産に適した、居住しやすい土地だということだ。したがって「流域」の語義を表す watershed は (8c) のように農業、あるいは (7) のように畜産と結びつくことが多い。分水嶺は山の頂上にあることが多いため居住や農業の文脈で現れるとは考えにくく、これはやはり「流域」と解釈されねばならない。地域住民の暮らし、飲料水、農業、灌漑(用水)、畜産、あるいは治水といった文脈で用いられる watershed は流域を表しているのが普通である。

他方、川の流域は人が住みやすいだけでなく、多様な生物を育む場でもあ

る。環境問題に対する近年の意識の高まりを反映してのことだろうが、「流域」の語義が環境や生態系、あるいは自然保護活動の文脈で用いられている例も多数観察された。(6b)にも *ecosystems* という語が現れていることに注目しよう。

ところで、現在でこそ電車・自動車・飛行機が発達しているが、これはこの100年足らずの間に起きた変化にすぎず、それ以前には水運こそが物流の要だった。しかしながら COCA に集められているのは現代の文例ばかりであるためか、水上輸送の文脈で用いられている *watershed* の例はほとんど見られなかった。川を利用して丸太を運搬することを示す (5c) はその珍しい例である。丸太は水がある限り浮かべて運ぶことができるが、分水嶺付近では丸太を浮かべられるような流れがないので、水系から別の水系へと人力で運んだものと思われる。これは分水嶺をまたぐ作業であるので当然のことながら山越えを伴ったはずである。このように水運が物流の主役だった時代には分水嶺は特殊な役割を担った地形だと認識されていたと考えられる。時代とともに水を利用しない輸送が増加すると、それに伴って「分水嶺」の語義の *watershed* の用例が減少したのかもしれない。

3.2.2.2 「分岐点」について

上述のとおり *watershed* が「分岐点」の語義で使用されていたのは58例で、「流域」の半分にも満たなかった。それでも *watershed* の主要な語義であることは確かである。ではこちらの例も確認しておこう。

(9) It's not difficult pointing out the watershed moment of his eight-year tenure as the team's general manager.

「分岐点」の58例中、(9)に見るように *moment* が後続するものが14例（うち1例は複数形の *moments*）を占めた。また *event* が後続するものも9例（直後に “*political event*” を伴うものを含めると10例）認められた。これ以

外に比較的多く見られたのは election（3例）である。

いずれにせよこの語義での watershed は名詞の直前に置かれて形容詞的な役割を果たすものが圧倒的に多い。すなわち「分岐点となった瞬間／出来事／選挙」といったように、である。それ以外の用法としては次のようなものが見られたが、わずか4例に留まった。

(10) a. The eighteenth century is the watershed of mankind's material progress.

b. [T]his last '94 election was a watershed for our party[.]

c. Although 1977 served as the watershed, it was in 1967, [...]

d. What began as an ordinary gray day in Moscow ended as a watershed in Soviet history.

(10a, b) は be 動詞の補語の位置に現れるものであり、叙述用法と言ってよいと思われるが、2例のみだった。また (10c, d) に見るように、こちらも2つのみだが、as に導かれている例が見られた。

3.2.2.3 その他の語義

以上で全200例中198例について見たが、残りの2例は次のようなものだった。

(11) a. The spinal canal is extracted using a watershed algorithm and directed acyclic graph search.

b. Good, simple American flavors from the days before processing: Only Watershed gets this.

私はコンピュータに関しては素人なので正確な解釈は手に余るが、コン

コンピュータの画像処理の分野で用いられる技術の中に watershed algorithm と呼ばれるものがあるようで、(11a)の watershed はそれを指しているのだと思われる。つまり専門用語であり、watershed の語義としては特殊なものだと言ってよいだろう。

また(11b)の Watershed は飲食店の名前（つまり固有名詞）のようである。

3.3 第二の調査

watershed の語義はそれぞれどのような語と共に起る傾向が認められるかについて、ある程度のことは3.2.2.1節および3.2.2.2節で述べた。しかしこれは COCA から採った200例に私が実際に目を通した上で感じたことを述べたものであり、要するに多分に私の直観に依拠するものである。とりわけ「分岐点」の用法についてはある程度傾向が認められたものの、「流域」については用例も多く「分岐点」ほどは顕著な傾向を感じ取ることができなかった。

そこでより客観的な結果を導き出すために第二の調査を行った。COCA を用いてランダムに集めた watershed を含む200の用例にはどのような名詞が含まれているかを調べた。この調査には英語形態素解析ソフト TreeTagger³ を使用し、TreeTagger の分析結果を処理するために統計解析ソフト R を利用した。なお集計の際には語形を語彙素に直した上で（つまり複数形はすべて単数形にした上で）集計したことをあらかじめお断りしておく。

3.3.1 調査結果

3.3.1.1 再び「流域」について

「流域」の語義の watershed と共に起る名詞のうち頻度の高いもの（6回以上現れた語）は次のとおりとなった。ただしすでに指摘したように1つの用例に watershed が複数回現れる用例が見られたが、それは「watershed と共に起る名詞」には含めなかった（ちなみに watershed と共に起っていた watershed は14例あった）。また大文字で始まる語も見られ、これはつまり固

有名詞の一部を成しているということだが、それらは以下括弧つきの数字で示す。

(12) water 30 (4), river 23 (15), state 12 (4), bay 11 (9), area 10, community 10, management 10 (3), district 9 (6), land 9, city 8 (2), protection 8 (3), county 7 (5), plan 7, research 7 (3), conservation 6 (3), creek 6 (5), ecosystem 6, forest 6 (1), lake 6 (2), percent 6, program 6, project 6 (1), soil 6, university 6 (6)

例えば river は watershed の前後に23回現れたが、そのうち15回は大文字で始まる River であり “the Santa Clara River” のような形で用いられているということの意味する。したがって area は10回現れたが、大文字で始まる例は見られなかったということである。

これを見るとまず、川や水域を表す語が多いこと、また一部の語は固有名詞として現れている比率が高い (river は23回中15回、bay は11回中9回) ことが分かる。water、river、bay に加えて creek や lake も該当する。次いで state、community、district、city、county のような行政区分や地域社会を表す語、あるいは land や forest のように自然界の地形を表す語が多いことが見て取れる。area もこれに該当するだろう。

川は流域の住民の暮らしに影響を与えるから調査 (research) が行われ、それは大学 (university) などの研究機関が主導することもある。川は土壌 (soil) にも影響を及ぼし、その逆に土壌もまた川の水質に影響を与えることだろう。地域住民は治水をし (management)、川が育む生態系 (ecosystem) を保護し保全する (protection、conservation) よう計画 (plan、program、project) を立てて取り組む。これが watershed と共起する名詞から浮かび上がる watershed の姿であり、これはどう考えても山頂付近の分水嶺を指す語ではない。これは多数の住民が暮らし、農業や牧畜を営む平地での話であり、

こうした watershed は「流域」を表していると考えねばならない。⁴

5回現れた名詞も興味深いので挙げておく。(12)で挙げたものと比べると頻度が下がるので大文字で始まるかどうかは考慮しなくてよいだろう。

(13) council, development, effort, fish, nitrogen, people, restoration, scientist, study, tree, year

watershed と共起する形容詞も興味深いものがある。とはいえ最も頻度の高かった new (10回) は watershed との関係が見えづらいので、比較的頻度の高かった語のうち興味深いもののみを選んで挙げておく。

(14) natural 8, public 7, environmental 6, local 4, agricultural 3, national 3

3.3.1.2 再び「分岐点」について

COCA から採った200例中「流域」の用例が136だったのに対して「分岐点」は58であるから、共起する名詞の集計結果も数値は当然低くなる。比率で考えると「分岐点」で3回現れていたならそれは「流域」で7回現れたものに匹敵すると見なしてよいだろう。いずれにせよ watershed と共起していた名詞のうち3回以上現れたものは次のとおりである。なお「流域」の語義と同様、1つの用例に watershed が複数回現れる用例が見られたが、それは含めていない(ちなみに4例あった)。

(15) moment 15, event 12, election 6, year 6, history 4, life 4, behavior 3, case 3, day 3, judgment 3, New 3, professor 3, time 3, York 3

New と York とがそれぞれ3回ずつ現れているが、これはもちろん New York のことである。例文を確認したが分岐点の語義と深く関連しているとは

判断されなかった。

では関連が深いと思われる語を確認しよう。見てのとおり3.2.2.2節で指摘した **moment**、**event**、**election** が上位を占めた。3.2.2.2節では **watershed** の直後に用いられていた名詞に限定したが、検索の範囲を広げてもやはりこうした語が上位に来ることが分かる。

これ以外には **year** と **day** が見られるのが興味深い。分岐点となった年や日など、時を表す表現—これには **moment** も該当する—がしばしば共起することが見て取れる。(10b, c) でも **year** という語は現れないものの、その代わりに '94や1977といった年を表す具体的な数字が現れていることに注意しよう。こうした具体的な数字はコンピュータを用いた機械的な処理では **year** の例として勘定されることはないが、こうしたものも含めれば年を表す語句の出現頻度はもっと高くなると考えられる。

さらに **case** と **judgment** の頻度が比較的高いことも重要だ。すでに見たとおり「分岐点」の **watershed** は選挙の文脈で用いられることが珍しくないが、それに加えて裁判の文脈でも使用されることが判る。**case** の3例のうちわずか1例ではあるが“**Supreme Court case**”の形で用いられていたことも付言しておこう。

4

前節での調査は、**watershed** は「流域」という語義で用いられることが極めて多いことを示している。では本稿冒頭で触れたもの以外の英和辞典の記述はどうなっているのだろうか。さらにいくつかの英和辞典について記述を確認しておこう。

(16) 『アンカーコズミカ英和辞典』(初版、学習研究社、2008年)

1 分水界 [線].

2 [比喩的に] (事態などの) 重大な分岐点; 転機.

3 [the ～] (英) テレビ番組境界時間. (通例午後9時以降のおとな向き番組と、暴力シーンなどを控えた子供向き番組の放映切り換え時).

(17) 『オーレックス英和辞典』(第2版、旺文社、2013年)

1 〈…における〉分岐点, 転機

2 『地』分水嶺 [界]; (河川・湖などの) 流域

3 ((the ～) (英) ウォーターシェド (the 9 o'clock watershed) (子供に悪影響のあるテレビ番組の始まる時刻. 通例午後9時))

(18) 『コンパスローズ英和辞典』(初版、研究社、2018年)

1 (重大な) 分岐点; 転機.

2 ((米) (川の) 流域.

3 分水線, 分水界.

the (9 o'clock) watershed [名] (英) 子供が見るべきではない番組が始まる(夜9時の) 時刻.

このように(17)や(18)は「流域」の語義を採録していることが判る。

5

本稿ではCOCAを用いた観察を通して watershed の語義について考察した。その結果、「流域」の意味で用いられることが圧倒的に多いこと、「分水嶺」の意味で用いられることは極めて少ないことを示した。さらに「流域」の用例は「分岐点」の用例よりもかなり多いことも示した。この結果を踏まえて、学習者用英和辞典の“watershed”の記述に修正を加えることを提案したい。前節で確認したようにすでに「流域」の語義を採録している学習者用辞典も現れてきている。

なお、「分水嶺」の用例が少ないことは事実だろうが、だからと言って学習

者用英和辞典の“watershed”の記述からこの語義を削除すべきだとは私は考えない。「流域」と「分岐点」とが並べられているだけではこれら二つの語義の関連性が分からない。元来 watershed は分水嶺を意味する語だと知ることによって流域と分岐点とを結び付けることができる。また流域は流域でも山頂付近の流れを指すことも少なくなく、単に流域という語義を知っているだけよりも「本来は分水嶺を意味する語だ」とも知っておく方が遙かに豊かに watershed の持つニュアンスを捉えることができるはずである。この意味でも「分水嶺」の語義は記載されるべきだと思う。

それはそれとして、(8b) や (12) で見たように watershed は bay と共起することが少なくないのだ。「ある水系と別の水系との境界線である分水嶺」というよりは「分水嶺から始まり海に注ぐまでの水系、およびその周辺の地域を含んだ全体」を指すと捉えておくことが watershed という語の理解には欠かせないと私は考える。

注

- 1) 文献初出とされているのは1874年の“The Missouri Region, in its broadest sense, as embracing the whole watershed of that great river and its tributaries.”という例である。また *OED* は1880年に出版された Webster の辞書の補遺に water-shed が採録されているとし、その例文も掲載している。因みにこの「Webster の辞書」とは Noah Webster が編集した *An American Dictionary of the English Language* を、Webster の死後 Chauncey Goodrich が改訂した *New and Revised Edition* のことであり、1864年以降に刊行されたのだが、そのうち補遺は1880年に出版された。このような事情を考慮すると「流域」の watershed が1880年当時には現れて間もない用法だと認識されていたと推測され、1874年の用例はその最初期のものだと考えられる。
- 2) 上記注1で確認したように1874年の用例はミズーリ川の流域に関するも

の、また1880年に出版された Webster はアメリカの辞書であり、ここから推測すると「流域」の語義はやはり主にアメリカで用いられるのかもしれない。

- 3) 日本語の文章（に含まれる一つ一つの文）を語に分解するソフト（MeCab がその代表例だと言ってよいだろう）は通常「日本語形態素解析ソフト」と呼ばれる。そして TreeTagger は英語の文章に対して日本語形態素解析ソフトと類似の処理を行うため「英語形態素解析ソフト」と呼ばれることが多い。このためここでは慣例に従っておくことにする。とはいえ TreeTagger が行うことを言語学的に考えると「語彙素解析ソフト」「品詞タグ付けソフト」などと呼ぶのが適切であろうと思考する。
- 4) なお (12) で 6 回現れている “percent” について補足すると、流域に関する様々な数値に対して用いられており、percent の対象は文脈による。例えば “Approximately 12 percent of the catchment area of the Balamban watershed [...]” という例では流域の集水量、“Loggers will have to leave 15 percent of the trees in every watershed they cut.” という例では流域に自生する木の量に対して用いられている。

参考文献等一覧

- 『アンカーコズミカ英和辞典』、初版、山岸勝栄（編）、学習研究社、2008.
- 『ウィズダム英和辞典』、第4版、井上永幸・赤野一郎（編）、三省堂、2021.
- 『オーレックス英和辞典』、第2版、野村恵造・花本金吾・林龍次郎（編）、旺文社、2013.
- 『コンパスローズ英和辞典』、初版、赤須薫（編）、研究社、2018.
- 『ジーニアス英和辞典』、第5版、南出康世（編）、大修館書店、2014.
- 『ジーニアス英和大辞典』、初版、小西友七・南出康世（編）、大修館書店、2001.

Baayen, R.H. (2008), *Analyzing Linguistic Data – A Practical Introduction to Statistics using R*, Cambridge: Cambridge University Press.

Corpus of Contemporary American English

<https://www.english-corpora.org/coca/>

Gries, Stefan Th. (2013), *Statistics for Linguistics with R*, 2nd ed., Berlin/
Boston: Mouton De Gruyter.

—(2017), *Quantitative Corpus Linguistics with R*, 2nd ed., New York/
London: Routledge.

英語形態素解析ソフト TreeTagger

<https://www.cis.uni-muenchen.de/~schmid/tools/TreeTagger/>

統計解析ソフト R

<https://www.r-project.org/>

On Watershed

Kimihiko Kuromiya

The Oxford English Dictionary defines one of the senses of *watershed* as “the whole gathering ground of a river system.” On the basis of a research conducted using *Corpus of Contemporary American English*, this article shows that the word *watershed* is used most frequently in that sense, at least in American English, in spite of the lack of any mentions of the sense in most of the English dictionaries for advanced learners published in Japan.